

トマス・アクィナス『神学綱要』における神的ペルソナ論 （『神学綱要』抄訳）

Divine Persons: translation of selected chapters from 'Compendium Theologiae'
by Thomas Aquinas

山口隆介
Yamaguchi Ryusuke

要 旨

『神学綱要』 Compendium Theologiae は、日本ではほとんど研究されないできた著作であり、全体の邦訳もいまだ存在しない。しかし、例えば祈りに関して、『神学大全』における祈りの議論とは違う視点で、すなわち『神学大全』では正義の徳に属する業として祈りを論じているのに対し、『神学綱要』では希望の徳との関連で論じるなど、著作としての独自性がないわけではなく、また、コンパクトであるため『神学大全』より議論の大きな流れを捉えやすいという利点もある。本稿は、『神学綱要』第1部第50～67章を訳出したものである。邦訳がない本書の神的ペルソナ論を知る手掛かりとなれば幸いである。

凡例的なことを述べるなら、訳を一通りに限定して示すことが現時点では困難な個所については、「・」で複数の訳を併記した。また場合によっては、原語を註によって示した。

Key Words : Compendium Theologiae, 『神学綱要』, 神的ペルソナ, 属性, 関係, しるし

第50章 神のうちではペルソナが3つであることは本質の一性と対立しないこと

さて言われてきたこと¹をすべてまとめると必然的に、神性のうちにはなんらかの意味での三性を帯びているものを我々は置いているが、これは本質の一性および単一性とは対立しないということになる。というのは、神は、御自身のあるがままにおいて実在し、御自身によって理解されており、愛されているものとしてある、ということは認めなければならないからである。

また別の論だが、以上のことは、神のうちと我々のうちで起きる。すなわち、自分のあるがままだと人間は実体であるが、彼〔人間〕の理解するはたらきと愛するはたらきとは彼〔人間〕の実体ではないので、人間は確かに、そのあるがままで考えられるなら、ある種の自存する事物であるが、その知性だけを見るなら自存するもの・事物ではなく、自存する事物によるある種の志向性である。そして、〔人間が〕それ自身のうちに、愛するもののうちの愛されるものとしてあるという観点でも同様である。それゆえ、人間のうちでは以上のように、ある種の三を考えるこ

とができる。すなわち、自分自身のあるがままである人間と、知性のうちにある人間と、愛のうちにある人間と。しかし、これらの三は一ではない。というのは、その〔人間の〕理解のはたらきはその〔人間の〕存在ではなく、愛するはたらきの場合もまた同様だからである。そしてそれら3つのものの1つだけが、自存する事物である。すなわち、それ自身のあるがままである人間である。

しかし、神においては存在と知性のはたらきと愛のはたらきは同一である。したがって、御自身のあるがままの存在としてある神、知性としてある神、そして愛としてある神は一つであり、そうでありながら、それらの一つ一つが自存している・実体としてある。そして、知性あるものとしての自存する諸事物を、ラテン人たちは人格と呼び習わしていたが、一方ギリシア人はヒュポスタシスと呼び習わしていたので、それゆえ神について〔語る時〕ラテン人は3つのペルソナ^{ペルソナ}と言い、一方ギリシア人は3つのヒュポスタシスと言う。すなわち、御父と御子と聖霊とを。

第51章 神のうちで3つのペルソナに対立があるように見える理由

しかしながら、これまで述べてきたことから、ある種の対立が生じると思われる。なぜなら、神のうちになんらかの三性を帯びているものが置かれるなら、あらゆる数はなんらかの区別をもたらすので、必然的に神のうちになんらかの差異を置くことになり、それ〔差異〕で3つのものが相互に区別されるということになるだろう。またそうなれば、神のうちに最高の単一性はないことになるだろう。すなわち、三が相応しいと言う場合、つまり3つのものが区別されている場合は、必然的にそこに複合があることになり、先の箇所での議論ⁱⁱと対立する。

さらに、既に示されたとおり、神が1つであり、3つではあり得ないことが必然なら、また、どんな1つの事物も、それ自身から生ずる、あるいは発することはないとすると、神が生まれている、神が発出しているということは不可能であるように思われる。したがって、神のうちに、父と子、そして発出する聖霊の名を置くことは偽である〔ことになる〕。

第52章 〔以上の〕議論への解答：または、神のうちには関係による区別以外ないこと。

さて、この疑問を解決するためには、こう始めなければならない。現実在が多様であるため、多様な事物のうちには、あるものが他のものから生じ、あるいは発する多様な様態がある。すなわち、生命を欠いている事物の場合は、自ら動くものではなく、外的に動かされ得るのみなので、あるものは別のものから、外的に変化させられるという形で生じる。例えば、火から火が生じ、空気から空気が生じるように。

しかし、生物の場合は、自ら動くことがそれらの属性であって、生むものそのもののうちで生まれる。例えば、動物の仔や植物の実のように。また、多様な力と同一物の発出による発出の多様な様態を考えることができる。

すなわち、〔それらの〕力のあるものは、そのはたらきが、質料的である限りでの体にしか及ばない。例えば、植物的靈魂の力についてみればよく分かる。植物的靈魂は栄養、成長、生殖に関わり、この、靈魂の〔特徴をなす〕力〔生殖に関わる力〕によって、生きものたちの中では、それを生んだものと、物的に区別されながらもなんらかの形で結びついている物的なものだけが生じる。

また、力のあるものは、そのはたらきが、たとえ物体を超えることはないとしても、物体の種・形象には、〔物体性を〕脱け出して達する、すなわち質料なしにそれらを受け取る力としてはたらく。例えば、感性的靈魂のあらゆる力に見られるように。というのは、哲学者が言っているⁱⁱⁱように、「感性は諸々の種・形象を受け取るものだ」からである。しかし、このような力は、〔それぞれ〕なんらかの様態で非質料的に事物の形相を受け取るとは言え、それらを身体の器官なしで受け取っているわけではない。したがって、もしひょっとして、靈魂のこのような力のうちに発出が見られないなら、たとえ、身体の器官の助けがまったくないわけではないとしても、発出するものは、そこから発出してきた〔元の〕ものと、物的に区別されている物的な何かでも、なんらかの形で結びついている物的な何かでもないが、非物的、非質料的にはなんらかの様態で区別され、結びついているものであるということになる。すなわちこのようにして、諸々の動物のうちで、イメージされた事物のかたどりが発するのである。これら〔かたどり〕は確かに想像力のうちに、物体が物体のうちにあるようにして存在するのではなく、〔それぞれ〕なんらかの靈的な様態で存在する。またそれゆえ、アウグスティヌスは、視覚的イメージを靈的なそれと呼んでいる^{iv}。

また、想像力のはたらきによっては何も、物的様態では発出しないなら、このこと〔物的様態では発出しないということ〕は、知的部分のはたらきによる場合には、〔想像力の場合〕より、かなり強力に起きるだろう〔物的様態から遠ざかるだろう〕。これ〔知的部分〕は、そのはたらき〔が実現したもの、現実態としてのはたらき〕すなわち業のうちですら身体の器官をまったく必要とせず、その〔知的部分〕のはたらき〔が実現したもの、現実態としてのはたらき〕すなわち業はまったく非質料的だからである。というのは、言葉が知性の業として発するのは、語るものの知性そのもののうちに実在するものとしてであり、場所としてその〔知性の〕うちに保持されているものとしてではなく、物体としてそれ〔知性〕から分離されたものとしてでもなく、確かに起源への秩序において〔知性〕そのもののうちに実在するものとしてである。そして、同じことが意志の業として起きる発出にも言える。つまり、すでに言われているように、愛されている事物が愛するものの中に存在するような仕方存在しているのである。

たとえ、知性の力と感性の力が、それそのものとして見る限り、植物的靈魂よりも高貴であるとしても、それでも、人間のうちに、あるいは他の動物のうちには、イメージに関わる部分の発出として、あるいは感性的な部分の発出として、何か、当の種の現実在という形で自存するものが発出するのではない。このこと〔当の種・形象の現実在という形で自存するものが発出すること〕が起きるのは、植物的靈魂のはたらきに即して起きる発出を通してのみ起こる場合のみであ

る。そしてそれゆえ、このことは、質料と形相とからなる複合体の場合は常に、同一の種に属する個物の多数化は、質料の別に応じて起きることになる。それゆえ、人間の場合と他の動物の場合は、形相と質料から複合されているので、物的な区別によって、種を同じくしながら個体として多数化するのであるが、これ〔物的な区別〕は、植物的靈魂の業^{わざ}に即して見出されるのであって、靈魂の他の業^{わざ}として見出され得ない。また、質料と形相とによる複合体でない諸事物の場合は、形相的区別だけしか見出され得ない。しかし、もし形相が、すなわちそれによって区別がなされるものが、事物の実体であるなら、必然的に、あの〔ここで言われている〕区別は、なんらかの自存する諸事物のものであることになる。しかし、あの形相が事物の実体でないならそうはならないだろう。

したがって、知性すべてに共通のものがあるなら、既に言われていることから明らかなように、知性のうちに宿るものはある面では、理解するものである限りでの理解するものから発出するのでなければならず、またある面では、その発出によってそれ〔理解するもの〕とは区別されるのでなければならない。例えば、知性の宿し・概念^v、すなわち理解された志向的存在^{vi}、理解する知性とは区別されるように。また同じく、愛する人の情動は、それによって愛されるものは愛するものうちにあるので、愛するものである限りでの愛するものの意志から発出するのである。

しかし、その理解するはたらきがそのものの存在であるということは神に固有のことなので、必然的に、知性の宿し・概念は、すなわち理解された志向的存在は、その〔神の〕実体であるということになり、また、愛するものである神御自身のうちでの情動についても同様である。したがって、〔結論として〕残るのは、神の知性の志向的存在、すなわちその〔神の〕御言葉が、それ〔御言葉〕を生み出すものと、実体である限りの存在としては区別されず、あるものが別のものから発出しているという観点での存在としてのみ区別されるということである。そして、愛するものであるうちでの愛の情動についても、すなわち聖霊に関わるものについても、同様である。

したがって以上のことから明らかなのは、既に言われた^{vii}ように、神の御言葉、すなわち御子が、御父と実体として一であっても差し支えないが、しかし、発出という関係に関しては彼〔御父〕と区別されるということである。それゆえ、自分自身からそれと同じものが生じることはなく、発することもないことは明らかである。御子は、御父から発出したという面では、彼〔御父〕とは区別される。そして、同一の論が、御父と御子とに関係していることを踏まえるなら、聖霊についても言えるのである。

第53章 御父と御子と聖霊が区別されている関係は、現実であって、単なる思想上のものではないこと

さて、御父と御子と聖霊が相互に区別されている関係は、現実の関係であって、単なる思想上のものではない。というのは、そのような関係は思想上のものであって、それが事物として現実に存在しているということを帰結せず、単に把握にされているだけだということを帰結する。例

えば、石の左右が現実の関係でなく、思考上の関係としてのみ存在するようなものだ。石に〔利き腕のように能力を側面としての右側と比較的弱い側としての左側を決める決め手となる〕能力が現実にあるわけではなく、石に左側があるというのは、動物〔の体〕に左側があるからという理由でそう把握するものの受容という形でしかあり得ないからだ。しかし、左と右は、動物の場合は、現実の関係である。動物の〔体の〕それぞれ決まった部分で、それぞれの能力が現に見出されるからである。したがって、これまで言われてきた関係、すなわち御父と御子と聖霊が区別される関係が、現実にある神のうちに現実存在するので、必然的に、これまで言われてきた関係は現実の関係であって、単なる思考上の関係ではないということなる。

第54章 このような関係は、偶有として内在するものではないこと

そして、〔このような関係が〕偶有として内在するということとはあり得ない。というのは、ある意味では、その関係から直接帰結するはたらきが神の実体そのものだからであり、またある意味では、すでに示されたとおり、神のうちには偶有があり得ないからである。それゆえ、これまで言われてきた関係が、神のうちで現実存在するなら、必然的に、偶有として内在しているものではなく、実体としてあるものだけということになる。また、他のもの場合は偶有として存在するものが、神のうちでは実体として存在し得るのはなぜかということが、これまで論じられてきたことから明らかになっている。

第55章 ここまで言われてきた関係は神のうちではペルソナの区別として成り立つこと

したがって、神のうちにある関係は、区別は偶有としてではなく実体としてあるが、あらゆる知性的存在のうちでは^{viii} 実体としてあるものには、ペルソナの区別があるので、必然的に、ここまで言われてきた関係のゆえに、神のうちにはペルソナの区別が成立することになる。したがって、御父と御子と聖霊は、3つのペルソナであり、同じく3つのヒュポスタシスである。ヒュポスタシスという語はなんらかの完成した実体存在を表すからである。

第56章 三より多くのペルソナが神のうちにあるのは不可能であること

神のうちでは三より多くのペルソナがあることは不可能である。というのは、神のペルソナが実体の分割によって多数化ことはあり得ず、ただ、なんらかの発出関係によってのみ可能であって、しかもどんな発出であってもよいというわけではなく、どんな外的なものにも向けられていないような発出でなければならないからである。すなわち、なんらかの外的なものに向けられていたなら、神性を有することはなかったであろう。そして、神のペルソナあるいはヒュポスタシスであることはできなかつたろう。また、神のうちなる、外に向けられていない発出は、既に

言われたことから明らかなように、知性のはたらきとして、すなわち言葉が発するということとしてか、意志のはたらきとして、すなわち愛が発するということとしてか、いずれかでしか受け取れない。したがって、どんな神的ペルソナも、言葉としてか—これを我々は御子と言う—愛としてか—これを我々は聖霊と言う—いずれかとして発出しているのでなければ存在し得ない。

さらに、神はすべてを1つの直観で、御自身の知性を通して把握しているので、また同じく意志の1つのはたらきで、すべてを愛しているのであるから、神のうちでは言葉が複数であることも愛が複数であることも不可能である。したがって、御子は御言葉として発出し、聖霊は愛として発出するなら、神のうちでは子が複数であることも、聖なる霊が複数であることも不可能である。

さらに、完全なものとは、その外には何もないもののことである。したがって本性上自分の外から何かを受け取るものは、端的な意味で完全なものではない。それゆえに、端的な意味で、その本性上完全なものは、数的に多数化しない。例えば、神、太陽、光、またはそのようなもののように。そして、御子も聖霊も、既に示されたとおり、彼らのいずれも神であるので、端的な意味で完全なものであらねばならない。したがって、子が複数であること、あるいは聖なる霊が複数であることはあり得ない。

以上とは別に、自存する何かをあのものこのものとし、他のものとは区別されたものとするものは、数的に多数化することができない。個物は複数のものについて〔述語として〕語ることができないからである。さて、子性によって御子は「この」神的ペルソナであり、御自身で自存し、他のものから区別されている。あたかも、個体化する諸原理のもとでのソクラテスと「この」人格のように。したがって、個体化する諸原理は、それによってソクラテスが「この」人間であるという原理である限り、1つのものにしか当てはまらないように、子性も神のうちでは1つのものにしか当てはまらない。そして、御父と聖霊との関係についても同じである。したがって、神のうちでは父が複数であること、子が複数であること、聖なる霊が複数であることは、不可能である。

さらに、形相という観点からは1つであるもろもろのものを数的に多数化するのは、質料だけである。例えば、白が多数化するのは、複数の基体のうちにあることによってである。しかし、神のうちには質料はない。したがって、神のうちで種・形象と形相として1つであるものはなんでも、数的な多数化が不可能である。そして、父性と子性と聖霊の発出がこのようなものである。したがって、神のうちでは、複数の部分があること、複数の子や複数の聖なる霊があることは不可能である。

第57章 神のうちなる属性あるいはしるしについて、もしくは父のうちには数がいくつあるか

以上のようなものは、神のうちにペルソナの数だけ存在するだろうから、必然的に、ペルソナの諸属性、すなわちそれによって〔ペルソナが〕相互に区別されるものが、ある数だけ存在することになる。それらのうち3つは御父に当てはまる。1つはそれによって、御子からの区別のみ

がなされる。そしてこれが父性である。別のしるしによって、〔父は〕2つのものから分けられる。すなわち御子と聖霊から。そして、これは不生^{ix}である。御父は他のものから発出した神ではないが、御子と聖霊とは他のものから発出しているからである。3つ目は、それによって御父御自身が御子と共に、聖霊から区別される。そしてこれは、共通の息吹^xと呼ばれている。さて、御父がそれによって聖霊とのみ異なっている属性を示すことはできない。既に示されたとおり、御父と御子は聖霊にとって唯一の始原だからである。

第58章 御子と聖霊の属性の何であり、いくつあるかについて

さて、御子には必然的に2つのものが当てはまる。すなわち、1つは、それによって御父から区別されるものであり、これが子性である。他には、御父と共に聖霊から区別されるものがあって、これが共通の息吹である。そして、聖霊とのみ区別される属性を示すことはできない。前に述べたように、御子と御父は聖霊の始原として唯一だからである。

また同じく、聖霊と御子とが同時に御父から区別される属性も示すことができない。というのは、御父は、1つの属性、すなわち不生によって、つまり、発出することのないものとして、それらから区分されているからである。しかし、御子と聖霊の発出は1つではなく、複数なので、2つの属性が御父から区別される。さて、聖霊が1つの属性だけを有し、それによって御父と御子とから区別されており、それは発出と呼ばれる。また、ある属性は、それによって聖霊が御子からだけ区別され、あるいは御父だけから区別されるというような属性は、既に言われたことから明らかなように、あり得ない。したがって、5つのものがペルソナに帰せられることになる。すなわち、不生、父性、子性、息吹、そして発出である。

第59章 属性はなぜしるしと言われるか

さて、これらはペルソナの5つのしるしとすることができる。これらによって我々に、神のうちのペルソナの区別が知られるが、しかしながら、この5つのものは、属性と言うことはできないからである。もし、これが属性という概念で考えられているなら、1つのものにのみ当てはまるものが、固有に属するものであると言われるだろう。すなわち、父と子には息吹が共通して当てはまっている〔のだから、属性とは言えないのが分かるだろう〕。しかしながら、なんらかのものに固有だと、他のものとの関わり上言われるというようなこと、例えば2本足ということが、人間と鳥とに4本足の動物との関わり〔対比〕で言われるような場合には、共通の息吹を属性と呼んで差し支えない。

しかしながら、神のうちには、諸々のペルソナが関係だけに拠って区別されているが、諸々のしるしは、それに拠って神のペルソナの区別が知られるので、必然的に、諸々の関係に等しく関わることになる。しかし、それらのうち4つは真なる関係であり、それによって神的ペルソナが

相互に関わっている。しかし、5つ目のしるしは、すなわち不生の場合、その関係への関わりは、関係の否定としてのものである。〔それによって〕すなわち、肯定の類の否定と能力態の類の欠如がもたらされる。例えば、人間が人間の類に属さない、白いものが白のグループに属さない〔とされる〕ように。

しかしながら、知っておくべきは、諸々の関係のうちあるものは、それによってペルソナが相互に関係するものがゆえに、父性、子性として名づけられたものであって、本来これらが関係を表すのである。しかしながら、名づけ得ないもの、すなわち、それによって御父、御子が聖霊に関係づけられ、聖霊が彼ら〔御父と御子〕に関係づけられるようなものがあって、関係の代わりに起源の名を我々は用いる。すなわち、共通の息吹と発出が起源を表し、起源に従う関係を表しているのではないのは明らかである。このことについては、父と子の関係〔という観点〕を用いて〔さらに〕深く考えることができる。すなわち、生み出すことは能動的な起源を表し、これ〔能動的起源〕に父性という関係が伴う。一方、誕生が受動的な起源を表し、これに子性という関係が伴う。したがって同様に、〔起源である〕共通の息吹になんらかの関係が伴い、また発出にも伴う。しかし、関係は名づけることのできないものであるので、我々は関係の名の代わりに、はたらきの名を用いる。

第60章 たとえ神のうちに自存する関係が4つだとしても、ペルソナは3つ以外にないこと。

また考えねばならないのは、たとえ、神のうちに実在する関係が、既に言われたとおり、神のペルソナそのものであるとしても、だからペルソナが5つあらねばならず、あるいは関係の数に従って4つあらねばならないということはない。というのは、数はなんらかの区別を帰結するからである。また、一が不可分あるいは分割されていないものであるように、複数であることは、可分であり分割されている。というのは、ペルソナの複数であるためには、関係が、対置という意味で区別する力を有していることを要する、すなわち、形相的区別は対置によらざるを得ないからである。したがって、ここまで述べられてきた関係について考えるなら、父性と子性とは相互に対置関係^{xi}にあり、それゆえ、同一の担い手のうちで互いに関係しているのではないということになり、このため、父性と子性は2つの自存するペルソナであるということになる。また、不生は子性と対置され、父性とは対置されない。それゆえ、父性および不生は一にして同一の人格に当てはまり得ない。同様に、共通の息吹は父性とも、子性とも、また不生とも対置されない。したがって、共通の息吹は、御父というペルソナにも御子というペルソナにも内在して差し支えない。共通の息吹は特に、御父というペルソナと御子というペルソナとから離れては、自存するペルソナではない。さて、発出は共通の息吹に対して対置関係にある。それゆえ、共通の息吹が父と子とに当てはまるので、必然的に、発出は御父というペルソナ、御子というペルソナとは別のペルソナであるということになる。

またこのことゆえに、神がなぜ、しるし数が5であるからといって五性を帯びている物と言われず、ペルソナが3であることで3と言われるかが明らかになる。というのは、5つのしるしは、5つの自存する事物ではなく、3つのペルソナが3つの自存する事物だからである。またたとえ、1つのペルソナに複数のしるし、複数の属性が当てはまるとしても、それでもペルソナを成り立たせるものは、1つのものだけである。すなわち、これは、ペルソナが成り立つのは諸々の属性によって、つまり複数のものによって成り立つことだということではなくて、自存する関係的属性そのものがペルソナだということである。それゆえ、一なるペルソナに当てはまる複数の属性としるしを有するのは、自然本性の秩序に即して発出するものであり、それがペルソナを成り立たせると解さねばならない。しかし他のものは既に成立したペルソナに内在するものと解される。また、不生は御父の、それをペルソナとして成り立たせる最初のしるしであり得ないことは明らかである。というのは、ある意味では、否定によって成り立つからであり、ある意味では本来、肯定が否定に先んじているからである。また、共通の息吹は、自然の順序では、父性と子性を前提としている。愛の発出が、言葉の発出を前提とするように。それゆえ、共通の息吹は御父の最初のしるしではなく、御子のでもない。したがって、〔結論として〕残るのは、御父の最初のしるしは父性であり、御子の最初のしるしは子性であり、また聖霊の場合、発出だけがしるしだということである。

したがって〔この章の結論として〕残るのは、ペルソナを成り立たせるしるしは3つ、すなわち父性と子性と発出だということである。そして、これらのしるしは確かに属性であるのが必然である。というのは、ペルソナを成り立たせるものは、そのペルソナにのみ当てはまる〔他のペルソナには当てはまらない〕のが必然であり、すなわち、個体化の原理は複数のものには当てはまらないからである。したがって、ここまで述べられてきた3つのしるしは、ペルソナの属性と呼ばれる。3つのペルソナを既に述べたやり方で成り立たせるものとして。一方、ペルソナの他の属性あるいはしるしは、「ペルソナの」とは言われない。〔それらは〕ペルソナを成り立たせていないからである。

第61章 知性で〔思考の上で〕ペルソナの属性を取り除くなら、ヒュポスタシスは留まらないこと

また以上から明らかになるのは、知性によってペルソナの属性を取り除くなら、ヒュポスタシスは留まらないことである。というのは、知性によって、形相が取り除かれることで起きる解体の際、残るのは形相の基体である。白が取り除かれると表面が残り、それが取り除かれると実体が残る、その形相が取り除かれると第一質料が残るように。しかし、基体を取り除くと何も残らない。ところでペルソナの属性は、自存するペルソナそのものであって、先んじて存在する担い手に付け加わったものとしてペルソナを成り立たせるのではない。神のうちのなにものも、端的な意味で言われる分割されたものではあり得ず、相対的な意味でのそれにすぎないからである。

したがって、〔結論として〕残るのは、ペルソナの属性が知性によって取り除かれるなら、その分割されたヒュポスタシスは留まらず、ペルソナのしるしが取り除かれなければ、分割されたヒュポスタシスはそのまま留まるということである。

第62章 知性で〔思考の上で〕ペルソナの属性を取り除いても、神の本質は留まること

さてもし、知性で〔思考の上で〕ペルソナの属性が取り除かれた時、神の本質が留まるかどうかを問うなら、こう言わなければならない。ある意味で留まり、ある意味では留まらなと。というのは、知性によって起きる解体には2通りある。その1つは、形相を質料から取り去ることによるもので、こうすることで、確かにより形相的なものから、より質料的なものに至る。すなわち、第1の基体であるものが最後に留まる。一方形相は、最初に取り除かれる。さて、もう1つの解体は、普遍を特殊から取り出すことによるもので、これはある意味では〔先の解体とは〕順序が逆である。すなわち、ものを個物化する質料的な条件が、普通に見られることから分かるように、先に取り除かれるからである。

またたとえ、神のうちには質料と形相はなく、普遍と特殊もないとしても、それでも神のうちには、共通かつ固有で、共通の本性の担い手がある。というのは、諸々のペルソナは、理解の仕方に応じて、個々各々の担い手が共通の本性に関わるようにして、本質に関わっている。したがって、知性によって起きる第1の方式での解体で、ペルソナの属性が取り除かれるなら、それ〔ペルソナの属性〕は自存するペルソナそのものであるもので、共通の本性は留まらなと、第2の方式でなら留まるということである。

第63章 ペルソナのはたらきのペルソナの属性に対する関係

さて、既に言われたことから明らかであり得るのは、ペルソナの属性に対するペルソナのはたらきの関係は、知性にとっていかなるものなのか、ということである。ペルソナの属性は自存するペルソナであるが、自存するペルソナは各々の本性のうちで・各々あるがままに、その本性を、本性によって分かち合ってはたらいっている^{xii}。すなわち、形象の形相は、形象として同じものを生み出す始原である。したがって、ペルソナのはたらきは神性の分かち合いに関わるので、自存するペルソナは共通する本性を本性そのものによって分かち合うのでなければならない。

以上から2つのことを結論できる。それらの1つは、御父のうちにある生み出す力が神の本性そのものであること、すなわち一つ一つのはたらきをなす力がそれであり、それによってなにかがなされる始原である。もう1つのものは、ペルソナのはたらき、すなわち生み出すことが、理解方式によっては、神性をも、御父のペルソナの属性をも、すなわち、御父のヒュポスタシスそのものをも前提としている。たとえ、そのような属性が、〔それが〕関係である限りでは、はたらきの後に来るのだとしても、それゆえ、御父のうちで、自存するペルソナがあるということに

目を向けるなら、御父であるから生むのだとすることができる。また、関係を有しているということに目を向けるなら、反対に、生むから御父なのだと言うべきであると思われる。

第64章 御父および御子という観点で生み出すことを受け取る然るべき仕方

しかしながら、知るべきことは、能動的に生み出すことの父性への関係を捉えるのと、受動的に生み出すことあるいは誕生の、子性への関係を捉えるのでは、捉え方が違うということである。すなわち、能動的な生み出すこと・生殖は、自然の秩序において、生むペルソナを前提としている。しかし、受動的に生み出すこと、あるいは誕生は、自然の秩序において、生み出されたペルソナに先行している。生み出されたペルソナが、その誕生によって存在しているからである。したがって、能動的な生み出すことは、理解方式によっては、父のペルソナを成立させるものとしての父性を前提としているが、誕生は、子のペルソナを成立させるものとしての子性を前提しておらず、理解方式によってはそれ〔子性〕に、2つの意味のうちのいずれかで、すなわち、ペルソナを成立させるものとしてという意味か、〔子性が〕関係であるという意味か、いずれかの意味で先行している。そして、聖霊の発出に関わるものについても同様に理解されるべきである。

第65章 しるしとなるはたらきが諸々のペルソナと理性によってのみ異なっている、その方式

さて、しるしとなる諸々のはたらき、およびしるしとなる諸々の属性の間に〔我々が〕当てはめた関係により、我々はこう言いたい。しるしとなるはたらきは、事物としては、ペルソナの属性と違いはなく、理解方式によってのみ違っていると。すなわち、神の理解のはたらきは、理解する神御自身であるように、父の生み出すこと・生殖もまた、生み出す父そのものである。たとえ、それとは違った形で表されているのだとしても。また同じく、たとえ1つのペルソナが、複数のしるしをもっているとしても、それでも、そのうちにはなんの複合もない。というのは、不生は、否定的属性であるので、どんな複合もなしえないからである。一方、御父のうちにある2つの関係、すなわち父性と共通の息吹は、確かに事物としては同一であって、御父のペルソナに関わっている。すなわち、父性が御父であるように、御父のうちにある共通の息吹もまた御父である。そして、御子のうちであれば〔共通の息吹は〕御子である。しかしながら、〔ペルソナが属性を通してそれぞれに〕関わっているものの観点では、〔属性は〕異なっている。すなわち、父性によって御父は御子に関わり、共通の息吹によって聖霊に関わっている。そして同様に、御子は子であることによって確かに御父に関わり、一方共通の息吹によって聖霊に関わっているのである。

第66章 関係的属性は神の本質そのものであること

また、関係的属性そのものは、神の本質そのものであらねばならない。すなわち、関係的属性は、

自存するペルソナそのものである。また、神のうちに自存するペルソナは神の本質以外ではあり得ない。そして、神の本質は、既に示された^{xiii}とおおり、神の存在そのものである。それゆえ〔結論として〕残るのは、関係的属性は、事物として神の本質と同一だということである。

さらにまた、何かのうちにありながら本質以外のものであるものはどれも、そのものに偶有的に内在しているものである。しかしながら、既に示されたように神のうちには、何も偶有的に存在し得ない。したがって、関係的属性は事物として、神の本質と異なるものではない。

第67章 諸々の関係は、ポレタヌス派が言ったように外的に付加されたものであるのではないこと。

また、ポレタヌス派が言っていたように、ここまで言われてきた諸々の属性がペルソナのうちにはなく、外的にそれら〔ペルソナ〕に関わっていると言うことはできない。というのは、事物の関係は、関係付けられた諸事物の間の中にあらねばならないからである。このことは、被造物の間では明らかである。すなわち、事物の関係は、基体のうちの偶有のようにして、それら〔被造物〕のうちにある。そして、神のうちでペルソナが区別される関係は、既に示されたとおおり、事物の関係である。したがって、神のペルソナのうちでは、確かに何も、偶有としては存在し得ない。すなわち、被造物のうちでは偶有である他のものも、神に移し替えると、偶有の性質を欠くようになる。知恵と正義、そしてその他そのようなものが、既に示された^{xiv}ように。

さらに、神のうちには関係による区別以外あり得ない。すなわち、絶対的に言うならすべて、共通のもの〔であり、不可分で〕ある。したがって、諸関係が外的にペルソナに関わっているとすると、ペルソナそのもののうちにあるどんな区別も留まっていけないだろう。したがって、ペルソナのうちにあるのは関係的な属性であるが、しかしながらそれゆえ、それらはペルソナそのものであり、また神の本質そのものでもある。知恵と善性が神のうちにあると言われ、そして、既に示されたとおおり、神そのものにして神の本質であるように。

文献表

テキスト

1. S. Thomas Aquinas, *Compendium Theologiae, in: Opuscula Theologica, vol.1*, Marietti 1975
2. Thomas von Aquin, *Compendium Theologiae, Grundriß der Glaubenslehre*, übersetzt von Hans Louis Fäh, Heidelberg 1963

註

註における本書は『神学綱要』を指す。

- i 本書第1部第37～49章
- ii 本書第1部第9章
- iii アリストテレス『靈魂論』第2巻第12章
- iv アウグスティヌス『創世記逐語註解』第12巻第6章
- v *conceptio*. *conceptio* の訳語の候補に「宿し」という語を挙げているのは、本書第1部第38章「御言葉は神のうちでは概念・宿しと言われること」*Quod Verbum est indivinis conceptio dicitur* による。以下に同章の全文を訳出する。
 「さて、知性のうちに、内的な言葉として捉えられていることは、普通の言葉遣いでは知性の概念・宿しと言われる。すなわち、体の話で、うちに宿ったと言うなら、それは、生きている動物の子宮に、男がはたらきかけ、女が受け、生命を与える力によって、〔胎児が〕形作られたということである。それ〔女〕の方に妊娠〔という事態〕が起きるのだが、また、宿ったものそのもの〔子〕は、両方〔父親と母親〕の本性に、種に応じて同型の形相であるという形で関わるのである。さて、知性が把握するものは、理解すべきもの〔理解の対象〕が能動的なものとしてあり、知性が受動的なものとしてあることで、知性において形作られたものである。そして知性によって把握されたものそのものは、知性のうちに実在するものであり、かつ、動かすものである理解すべきものに対しては、それ〔知性によって把握されたもの、すなわち概念〕がある意味でその〔理解すべきものの〕類似物であるので、同型の形相であり、また、受動者としての知性に対しても、理解可能性の領域の存在を有するがゆえに、同型の形相である。そこからして、知性によって把握されているものは、知性の概念・宿しと呼んで誤りはない」。
- vi *intentio*
- vii 本書第1部第41～44, 49章
- viii *in natura quacumque intellectuali*
- ix *innascitas*
- x *communis spiratio*
- xi *oppositionem…relativam*
- xii *Proprietas enim personales sunt subsistentes personae: persona autem subsistens in quacumque natura agit communicando suam naturam in virtute suae naturae*
- xiii 本書第1部第11章
- xiv 本書第1部第23章